

ひまわりからの メッセージ

117号

2021.5.10.

NPO ひまわりの花内

西濃 圏 域

発達障がい支援センター

発行人: 中野たみ子

母の日は 感謝の日



今日は母の日です。朝、四時に目覚めて、まっさきに亡き母のことを思いました。

皆さんもきっとご両親のことに思いを馳せられた一日ではなかったでしょうか。今、自分がここに存在していること、それは先祖からずっと続いていく命のバトンのお蔭なのですから……。

でも、私は、母のことを思うと、同時に私を助けて下さった多くの人たちのことを思い出します。

母が私を産んだのは、四十歳の時でした。若い頃に脊椎カリエスを病み、私が生まれる五年前には長女を亡くしていました。お産は難産で、しかも弛緩性出血を起こし、産後五十日間も足腰が立たなかったと聞きました。母乳も満足に出ず、私は近所の方から、もうい乳をして育ちました。そして、母に代わって同じ村に

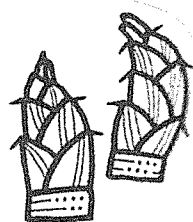
住むおくらさんというお婆さんが私の子守りをして下さったのです。おくらさんの押す乳母車に乗せられて、私が行く先はいつもお婆さん友達の家でしたから、幼い頃の私には、母の知らないお婆さん友達がたくさんありました。おくらさんがいない時でも糸車を回しているお婆さんや川で鍋底を洗っているお婆さんの横に座り込んでおしゃべりを楽しんだものでした。私はひ弱で、しょっちゅう高熱を出すような子どもだったので、高熱を出した私のために近所のお爺さんたちが大雪の中から万年青(おもと)の根を掘りおこして下さったこともあり、見知らぬ方が「この家に病気の子がいると聞いたから……」と薬を届けて下さったこともありました。かかりつけのお医者さんは、「これだから一人っ子は困るんだ」と笑いながら吾が家に泊って看病して下さいったこともあったのです。

思い返してみると、そういう方々のお蔭で、今の私はこうして生きているのです。誰も人は一人では生きて行けません。そして、今も私は多くの方々に支えられて、こうして仕事をしています。車のことも、パソコンのことも、私のSOSに応えて下さる方がいて、そして誰よりも日々出会う子ども達、お婆さん達、先生方が私に力を下さっているのです。

庭に出てみると草々の中に都忘れの花が二輪咲き始めていました。母の好きな花でした。「お母さん、ありがとう、支えて下さってる皆さんありがとう」今日は感謝の日でした。

学校・園と家庭

子育ての両輪として



新年度が始まって一ヶ月が経ちました。

子どもたちは、そろそろ新しい環境になじんで来ているでしょう。か、新一年生は、もちろん新しい学校に慣れることが必要ですが、お母さんから離れられない子や、行きしぶりの子も少なからずいるのではないですか。また、進級した子は、新しい担任や友だちの中で自分のことで気持ちを伝えることが出来はじめていますか。

ご家族の方はどうでしょう。「今年の担任の先生は、去年と比べて……」等と、まさか比較してはいらっしゃらないでしょうか。子どもを託す側として、早く安心したいという思いは強いかもしれませんが。

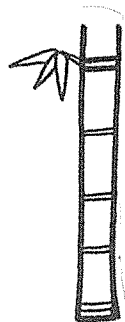
私は、園や学校と家庭は、車の両輪のようなものだと思います。子育てをしていく時に両方がバラバラでは困るのです。保護者の方は「うちの子はサポートブックをもっているし、当然合理的配慮をしてもらえるはず。学校は十分な支援をしてくれませんか。」と思われるし、学校から言えば「それはちょっと無理ですよ。」ということになると、家庭と学校が対立関係になってしまうでしょう。本当はお互いに良かれと思っているのに、不信感がど

んどん増していくのは残念なことです。

コロナの感染拡大が続く、私たちは不安の中で生活していますから、この心理的な不安定さはストレスを増大させて、平常心でいられなくなる危うい状況でもあります。そこで、学校と保護者の信頼関係のために、今までの経験から気が付いたことを述べさせていたただこうと思っています。

先生方に……

①「クレーマー」と決めつけないで



私が今まで接してきたお母さん方は、決してクレーマーではありませんでした。でも、上手く伝えるのは得意ではありません。つい要求だけが先走りしてしまいます。保護者の方には、お子さんの実態をきちんと伝えましょう。お子さんの困りの原因、要因を伝え、学校でできることと家庭でやってほしいこと、そして一緒に個別の計画を作って下さると良いでしょう。保護者の中には、自分のお子さんの特性や困りについて、とてもよく分かっている方もおられます。担任の先生よりも分かっているという方もありますから、クレーマーだと思わずに聞いて下さることが大事でしょう。

②「絶対に口にしてはいけないことば」とは？

保護者の方と上手くいかないと感じておられると、つい口にするのは「学校も一生けん命やっています。」とか「担

任は頑張っているんです。」ということばです。

でも、残念ながら、このことばが出た時点で、関係は最悪になってしまいます。長らくこの仕事をさせていただけに、このことばは禁句だと思います。だう先生方は教育のプロであり、教育者として一生けん命やるのは当然のことですから、保護者からすれば自己弁護としか見えないのではう。校長先生や教頭先生の口から、絶対に出してほしくないことばです。「私たちは、こんなに一生けん命にやってやっているのに……」と見下すようにもとらえられてしまて、かえって溝が深まってしまうことが多いと感じています。

③ 子どもたちの本当の困りを見逃さずに。

学校での評価は、学業成績が重視されるのは当然かもしれませんが、人が生きていく上で必要なのは、人との関わり方です。友だちと、どの様にかかわったか、良いか、どんなことばで表現したか、困っている子たちは、義務教育後を見越して、保護者の理解も含めて、支援をお願いします。目先の「大丈夫です」のことばで安心し、大人になって困っている人たちがたくさんいらっしゃるのです!!

高校進学についても同様です。「入れる学校」を目ざすのではなく、単位を取って卒業できるかどうか、「卒業できる学校」そして「卒業後をどうするかを見えすえた」進路指導をお願いします。

④ 保護者の方と話し合いが平行線のとぎ

お互いに子どものことを思っているのに、いつまでも分かり合えないこともあります。そんな時には、第三者が必要で、学校としてできること、家庭でできること等、中立の立場で考えられる人が中に入って下さるといいでしょう。

保護者の方に……



① 子どもの前で他人の悪口を言わないこと。

集団生活をしていると、子どもたちは色々なストレスをかかえています。家庭とちがう園や学校では集団適応力が問われますから、自分の思い通りにはいきません。そうすると、子どもたちは「僕は悪くないのに……」と考えます。そしてお母さんたちに色々と不満をぶちまけると思っています。そんな時、お子さんの辛い気持ちに共感するのは当然ですが、一緒になう悪口を言うのは考えものです。「〇〇くんにいじめられた」「△△先生は僕ばかり怒る」と、本人が感じているのですから、決して嘘ではありません。けれど、もしかしたら勘違いもあるかもしれません。そして、もしかしたら、あなたのお子さんの発言が相手も怒らせているのかもしれない。

親さんが子どもの発言を信じることは大事なことです。状況を見誤らないことが必要です。むやみに同調してしまうと子どもの判断を誤らせてしまうこともあるのです。

② 合理的配慮について

現在、全その子どもたちに教育を受ける権利があります。そして、教育の場として通常学級、支援学級、支援学校などお子さんの発達の段階や特性に応じた場が用意されています。しかし、どの教育の場を選ぶのかは、保護者の思いが優先されますから、「支援学校に進んだ方が良いのでは？」と勧められ、通常学級を選ばれる保護者の方もいらっしゃるわけです。に、その場合、保護者が望む支援や配慮が全てできるわけではありません。

保護者としては、かわいい我が子に……と思われるでしょうが、学校という集団の場で、出来ることと出来ないことがあるのは当然のことですよ。

③ 知的学級と情緒学級の違いについて

知的学級を参観させていただくと、通常の学年の教科書を使って学んでいる子がいます。知的学級に通う子どもたちは、抽象概念が苦手です。できるだけ具体物を使いながら、目で見て、体験して学ぶ必要がある子たちなのに、どうしてでよう。たずねてみると「親さんが同学年の教科書で教えてほしいと言われるのです」とのこと。「皆と同じように」とか「いつか通常学級へ戻れるように」という保護者の方の切なる願いはあるでしょう。しかし、一番大切なことは表面的に皆と一緒に……と望むことよりも、我が子が親亡き後も一

人で生きていけるには、どうしたらいいかを考えるべきではないでしょうか。

自分の子をよく知ること、そのためには、学校まかせ、福祉事業所まかせではいけないではありませんか？、学校と一緒に歩むことが大切です。我が子の理解のために私たちも利用して下さることも嬉しいのですが……。

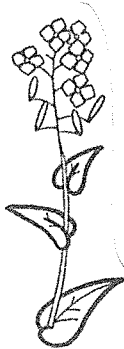
④ 将来の自立に向けて

コロナ禍では、自宅で過ごすことが多くなりました。これをチャンスとらえて、生活を見直してみよう。

食事の準備、手伝ってくれていますか？、食後、自分の食器は流しに運んでいますか？（この際、お父さんにもやってもらいましう）翌日に着る服の準備、お母さんが全てやっていませんか？、学校の準備は？、ランドセルの中にくしゃくしゃになったプリントは入っていないでしょうか？

自分の身の回りのことは自分でやりましよう。学校が休みの日の朝食はお母さんと一緒に作ってみるのもいいでしょう。親がやった方が早いからといって何でもやってあげていることは将来の自立の妨げかもしれません。学校ではできない、家庭教育ですね。

お知らせ



センター親の会は六月開催は未定。連絡がない場合はお問い合わせ下さい。 0584-84-8350